後藤紀一

少年の橋

需要全本请访问 www.ertongbook.com

後藤紀一
少年の橋

文藝春秋新社

少年の橋

〈著者略歴〉
大正4年1月山形県生れ。昭和5年京都の友禅図案家・北井紅華に師事、以後、山形で図案工房を開き活躍するかたわら、詩誌『無窮動』、同人誌『童会』などを発刊する。昭和21年共産党入党、27年には日展入選。29年共産党から除籍、『山形文学』同人となり「村の陽だまり」「少年の橋」を発表、「少年の橋」で昭和38年上半期芥川賞受賞。現在山形県美術連合会員。
現住所　山形市双月町459

昭和38年10月10日　発行
定価　350円
著者　©後藤紀一
発行者　小野詮造
発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西8～4
印刷　大日本印刷
製本　大口製本
落丁乱丁がありました場合はお取りかえします

少年の橋　153
罐の中　73
村の陽だまり　3

装帧　佐野繁次郎

需要全本请访问 www.ertongbook.com

少年の橋

一

ぼくの親父が、いまのように温和しくなったのは、ぼくが大人になりかけた頃からか、それとも、ついこの間、親父がおふくろと別居するようになってからなのか、その境目がわからない。若しかすると、元々親父は温和しい人間で、大した悪人ではないのかも知れない。そう気がつくと、なんだかそれが本当のように思えてくる。

ごく小さかった頃には、頭の一つぐらい殴られた記憶もあるようだが、物心ついてからは、怒鳴られたり辛い目にあわされたりした記憶は一つもない。とすれば、親父がまるで腑抜けのように温和しいのは今に始ったことではないのだろう。……しかし、そうは思いたくない。そう思ってしまっては、元も子もなくなってしまう。若しも仮に、それが本当だとすると、ぼくが現在、親父のことを、気違いだと思い、極悪人だと思いこんでいる理由がどこにもないことになってし

まう。どうも大人の正体というものは変てこりんという他はない。それともぼくの頭の調子が変てこりんなんだろうか。なにがなんだか解らなくなる。ともかく今迄どおり極悪人だと極めつけておいた方が一番無難なんだが……。そうは思っても、このごろのぼくは変に落着かない。気持ちばかりか心臓までが、時でもないときに太鼓を打つみたいになる。どどっどどっと胸の中で鳴りだすと、ぼくは人喰土人の太鼓を聴くような気持ちになってしまう。親父！　とぼくは思う。あの薄気味悪い太鼓を打ち鳴らしているのは親父の奴ではないかとぼくは思うのだ。あの腑抜けみたいに温和しい親父が、ぼくの知らない恐しい顔付きになり、ぼくの知らない呪文を唱え、狂ったみたいに太鼓を打っている。その音が、ぼくの胸に響いてくるのだ。ぼくが、変に落着けなくなったのはそのせいかも知れない。

ぼくが、おふくろや姉と一緒に今の家に越した次の日……。その日は元日だったから、御馳走を食べたり、姉の友達と夜遅くまで花札を引いたりして疲れて寝てしまったが、次の朝は起き抜けに親父のところへ行った。未だ置いてあるぼくの机や本箱を取りに行くのだから大威張りで家を出た。親父の家は、町の東を流れる広い川原の向う岸で山の麓にある。橋を渡るときに、なぜだか、すごく陽気な気持ちになり、尻を持ち上げてペダルを踏んでいった。

親父は、六畳の茶の間に寝ていた。そこは、ぼくがいつも寝ていた位置だ。机を持ちだそうとすると、親父が起きてきて手伝おうとするから、ぼくは、肘で突きとばしてやった。「そうか、

そうか」と、親父は謝るみたいにいうと、こんどは、台所でせかせかと炊事にかかった。本箱を整理しながら横眼づかいでみていると、器用な手付きで芹を刻んだり、小鉢に酢のものを盛り分けたり、数の子に醤油をかけたりしている。ぼくにも食わすつもりらしい。鼻唄まじりでえらく御機嫌だ。いい気なもんだ。ぼくは大急ぎで荷物をリヤカーに積み了えると、玄関の戸を思い切り乱暴に閉めて出て来てやった。中で親父が、頓狂な声で何かいったようだ。

ざまあみろ！　ぼくは自転車に飛び乗った。とうとう一言も口を利いてやらなかったことでぼくは満足した。ところが、橋を渡りかけて、ぼくは、ペダルを踏む足にさっぱり力が入らないのに気がついた。こんな荷物なんか川へほうりこんで、どっか遠い所へ行ってしまいたいと思った。

だいいち、こんどの家ときたら、まるで穴蔵みたいな六畳一間で、おまけに、近所は鋳物工場ばっかりだから、昼でも夜でも煙が吹き込んでくる。穴の狸が松葉いぶしをかけられているようなもんだ。選りに選って、おふくろはどうしてあんな部屋をみつけて来たんだろう。年中へまばかりやっているおふくろだが、こんどのミスは最高だ。それに、大晦日も元日も、やたらと煙をあげる工場なんてあったもんじゃない。よっぽど慾の皮のつっぱった奴ばかり住んでる町なんだな。誰も彼も、煤ぼけた顔に眼をぎょろつかせている。今まで、慾のない人間ばかり出入りする家で育ったせいか、こんな町の眼付きが気になってしようがない。

「あっ！」ぼくは、自転車の上で大声をあげた。思いだした、今日は二日で〝描き初め〟だ。親父の弟子たちが、その慾のない人間たちが大勢やって来て、画仙紙に思い思いの絵を描いた後で

大騒ぎをする日だ。毎年、ぼくも姉も描いた。おふくろだけはいつも頑として描かない。描けないからだというが、そんな筈はない、宝珠の珠の一つや、蜜柑の一つぐらい誰だって描ける。それが二十三年も一緒にいて……だから親父に嫌われたんだ。ぼくは今年も描きたい。もうぼくは、永久に描き初めは出来ないのだろうか。ぼくとあまり年の違わない弟子だっている。会ってみたくてしようがない。

ぼくは、穴蔵の二階へよいしょよいしょ荷物を運び込んだ。廊下にかがまっておふくろが雑煮を作っている。牛肉のコマギレか。親父のところでは鶏肉の匂いがしていた。誰も、どうだとも何ともいわない。「親父の奴、朝から酔っぱらっていて、寝てて起きなかった」と、ぼくは嘘をいった。そういわないと恰好がつかないような気がしたのだ。おふくろが振り返ったのを見て、ぼくはぎょっとした。恐ろしく念入りに化粧をしている。娘みたいに唇を塗っている。

「ねえ、草兵」と、へんに優しい声をだした。

「ほら、この窓から見える病院ねえ、あそこで草兵が生れたのよ」といった。その病院だって、煤けて工場みたいだ。それがどうしたっていうんだろう。

「お母さん、あそこへ八回も入院したわ」

そんなこと、何遍も聞いて知ってたさ。

「そのたんび家族全部で一部屋に入るのよ」

その頃の記憶なら、いくらかぼくにもある。ぼくが歩くというのに、親父はねんねこで背負っ

需要全本请访问 www.ertongbook.com

て、姉二人をつれて遠くの市場へ買物に行ったりした。帰りに公園を廻って、ブランコに乗ったりした。親父の昔の句集〝冬の柩〟というのに、〝春さむし子を背に子を連れ薬瓶〟というのや、〝陽炎や耳繃帯の子を連れに〟という句があることも知っている。今東京にいる一番上の姉がその頃別の耳鼻科へ通っていたことも思いださせる。この部屋がその病院の近所だから気に入ったというわけか。そんなバカな……。

「大きい方のフライパン持って来てくれた？　それとアルマイトのボール」

「忘れた」とぼくは答えた。忘れたんじゃなかった。

次の日また、ぼくは橋を渡っていった。ここへ来ると晴ればれする。なんといったって市で一番景色のいいところだ。伴淳が来てロケーションをしたところなんだ。すっかり雪景色になっている。親父は雪景色を描くのが得意だったな。

親父はもう起きていて作品に向っていた。竜山らしい。朱で下塗りをしている。パン画じゃねえなと、ぼくはホッとした。高砂だの、松に鶴だのを描いている親父をみると憂鬱になるんだが……。床の間に塵斗紙のかかった清酒やウイスキーが並んでいる。昨日、弟子たちが持って来たのだろう。ぼく迄が、なんか景気がつくような気になった。

「戸棚を開けてみな。うまいものがある」と親父がいった。フライパンとボールを風呂敷に包むと、親父に気づかれないように、ソッと戸棚を開けてみた。菓子箱の蓋がとってあって、シュー

クリームに似た洋菓子が山盛りになっている。「食うもんか」ぼくは又、玄関の戸をいきなり閉めて自転車に飛び乗った。今日も一言も口を利かなかった。

家に帰りつくと、大人の男靴があった。正ちゃんだな、と思った。なぜかぼくはどきりとした。どうして今迄このことに気がつかなかったのかな。正ちゃんはこの近所に工場を営んでいたのだ。親父の後援者でいくつもの会社の社長さんだ。今度のことで、ずいぶん親切に世話してくれた。引越しの日にも手伝いを寄越してくれた。酔うと愉快なおっさんだ。おふくろと酒を飲んでいる。正ちゃんが大きな札入れを出して、ぼくに正月の小遣い三百円をくれた。

「ちゃんとお礼をいいなさい」とおふくろがいった。

ぼくは、頭を下げただけで黙っていてやった。おふくろの唇がいやに紅い。それから朝から酒を飲んでいるのが気に食わなかった。

「そしたらね」とおふくろがいった。さっきからの話のつづきらしい。

「お前、別れたとたんに、いやに綺麗になったな。眼なんかきらきらしているじゃないか。なあんて、まるでモデルを見るような眼付きで見てるのよ。ゾオッとしたわ」

「しゃあしゃあしているんだな」

「そうなのよ。やっぱり別れた方がよかったんだな。なんて、あの人どんな気なんだろうね」

「江村君というのは、お偉いというのかどうか、掴みどころがないんだ」と、そういって正ちゃんが笑った。ぼくは口をはさんだ。「母さんいつ行ったの」

「きのうの夜さ。米の通帳をとりに。そしたら、いくら探してもみつからないの。隠したのかしら」

ぼくは、隠したのかしら……で頭に来てしまった。胸元にぐわっと何かが突き上げてきた。ぶちかます勢いでぼくは叫んだ。

「母さんは、行くことないじゃないか」

びくっとした様子で、おふくろはぼくを見上げた。三白眼の白眼のところに、ぼうふらみたいな血脈が浮いている。もう酔ってるんだ。

「親父へゆく用事は、全部ぼくがしてやるんだ」

頭のてっぺんからでるような声になった。なんで、こんなとき涙なんかでるのか。ぼくは三百円を掴むと表へとびだした。

今頃、おふくろは、「草兵は母親思いだもんで」なんて、本気で正ちゃんに話しているだろう。まったくおふくろときたら、話を浪花節みたいにしちゃうんだから……。それじゃまるでちっこべだ。

「バッカヤロウ」ぼくは思わず叫んだ。先を歩いている女の人が振り返ってぼくをみた。

だってそうじゃないか。いい気なもんじゃないか。おふくろなんてバカみたいなもんじゃないか、そうだ、バカだからぼくがついて来てやったんじゃないか。それと比べて親父はべらぼうに

頭が働く。だから彼奴は極悪人なんだ。だから独りぼっちにしてやったんだ。ぼくは、めちゃめちゃにペダルを踏んだ。

映画館が朝から開いていた。正月映画はどこも良くないと聞いていたが、洋画館に入った。切符を買うとき、ふと、奈子姉さんも映画かなと思った。そうだ、ぼくより先に正ちゃんから三百円貰ったんだな。いや、奈子姉さんには、油絵具を買うという口実があるから、もっと多いかも知れない、ひょっとしたら千円かも知れないな。うまいことやったな。なかは満員で、ドアからはみ出した客が、にわとりか尺取虫みたいに伸び上って首を振っている。こんなときぼくは便利だ。中学校全体で上背が十番以内だ。五尺七寸もある。いまはデカンショをはいているから六尺ぐらいかな。ぼくは、ポケットに両手を突っこんで人々の後へ少し離れて立った。「しまった」と思った。西部劇だ。ぼくは、西部劇とかギャング映画が嫌いだ。ピストルをぶっ放されると、自分の心臓に命中したみたいに胸がきゅんとなり、おもわずかがみ込んでしまう。チャンバラだってそうだ、錦之助や右太衛門ならかまわないけれども……。いつか親父があんまりほめるから、〝夜の鼓〟というのを観にいったら、最後の仇討のところがやっぱりいけなかった。そのときになると、殺される方の気持ちになってしまうのだ。ぼくはとうとう気絶しそうになった。

ぼくは、西部劇が終るまで廊下の長椅子で待つことにした。大人はこんなとき煙草を喫う。煙草っていいんだろうな……とぼんやり考えた。気がつくと、廊下でこんな風にしているのはぼくだけだ。どのドアも、尺取虫が群がっている。よくもあんなもの平気で観ていられるものだ。そ

れとも、ぼくは、奈子姉さんの言うように弱虫なのかな。いや弱虫じゃない。学校で一番喧嘩の数をかせぐのはぼくじゃないか。「弱虫ほどつまらない喧嘩はするものなのよ」なんてぬかす。「戦略の目標のない闘争なんて小児病よ」それから後長々と小難しい理屈を喋りまくる……。この頃奈子姉さんの奴、校外のサークルへ行くようになってからばかに威張るようになった。親父を糞味噌にけなすようになったのも、サークルへ行くようになってからだ。だつらくしゃだの、ひれつかんだの、ときには、ダラカン、ウラギリモノなどとおふくろと話していることがある。ぼくには、何の事か解らないが、おふくろが御機嫌で相手になっているところをみると本当なんだろう。そうか、親父の奴、呑んべエだけでなくウラギリモノだったのかと、そのときからぼくは益々嫌になった。

そういえば、地区委員会というところから、ぼくの大好きな若い人達がときどき家へやってくるけれども、最近では、親父の画室には入ってゆかないで、茶の間で、おふくろ達と話しただけで帰ってゆく。おふくろも奈子姉さんも長い話のあとで「お父さんなんて、もう、なあんにも取得がないんだ」と、きまって投げ出したいようにいう。それから、いつ家を出るかという相談になる。そのくせ、奈子姉さんの奴、〝実践論〟だの何だのという本を読んでいて、解らないところがあると、親父の前に本を突き出して「よう、ここ説明してみてよ」という。すると親父は日頃見せない真剣な顔付きになり、恐しく流暢な口調で講義をやりだす。ぼくの学校の先生なんかには、あれだけ喋る先生はまずないな。もっとも、おふくろがいうには、「お父さんは刃物いら

ずだ。口先で人を殺す」という。その通りだ。親父が憤って、といっても、そんなときの親父は顔にも声にでも憤っている様子は見せないのだが、おふくろを前にして文句を並べだすと大変なことになる。「そうだよなあ、お前という女はそういう女だったんだよなあ」といったしんみりした調子で、まるで唄でもうたうように際限なく続く。おふくろなんかは、一言だって口応えはおろか、うなずくことすら出来ない。たまには、おふくろだって何か云うことがある。そんなとき親父は、「そうだねえ、そうそう」などと聞いていて「ふふ……」と鼻の先で笑う。もっとも、おふくろのいうことといったら、ぼくが聞いていてすら頓珍漢なことしかいわないのだが……。しまいにおふくろは、追いつめられて真蒼になり、体ががたがた慄えだす。いまにも失神するのではないかと思う。そこまでしておいて親父は「まあいいさ。そんなに気にすることはないよ」というとケラケラと笑いだすのだ。ぼくはそんなとき出刃でもなんでも持ちだして、親父をぶっつりやってしまいたくなる。

一年ばかり前の夜、ぼくは本当に出刃を持ちだした。すると、それまで、おふくろたちの争いに無関心な様子で机に向っていた奈子姉さんが、ひゅう！　と、風のような声を出して、ぼくに組み付いてきた。おふくろが気配を察してぼくらのいる茶の間に入って来た。そして落着いた声で、「今日は我慢しなさい」といった。それを聞くとぼくは、脳天に釘を打たれたようになり、眼の前が真赤になった。急にぼくは気が変った。ぼくは出刃を眼の前のおふくろの腹にぶち込んでやりたいと思った。それだのにおふくろは、又同じことをいった。

需要全本请访问 www.ertongbook.com